

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320144

研究課題名(和文)新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築

研究課題名(英文)A Reconstruction of 13th to 17th Century North Asian History Based on a Synthesis of Newly Unearthed Buddhist Artifacts and Textual Historical Sources

研究代表者

松川 節 (MATSUKAWA, Takashi)

大谷大学・文学部・教授

研究者番号：60321064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：モンゴル高原のオルホン河流域から新たに発現した13～17世紀までの仏教遺跡や文字資料が、従来の歴史研究といかに整合性を持つかを追究する目的でカラコルム遺跡で発掘調査を行った結果、現地に造られた仏閣「興元閣」はオゴデイ・ハーンの宮殿址に建立されたのではなく、もとより仏閣として建立されたのであり、オゴデイの宮殿址は、別の場所、現在のエルデニゾー僧院内のどこかにあったであろうという結論に達した。以上の研究成果として、国際シンポジウム「世界遺産「オルホン渓谷の文化的景観」の10年 過去と現在」を現地で開催し、また『オルホン渓谷遺産』第3号と、国際シンポジウム論文集の計2冊を刊行した。

研究成果の概要(英文)：As a result of having performed the excavation in the remains of Khara Khorum Ruins for the seeking to make clear the consistency between and possibilities for synthesis of newly discovered 13th to 17th century Buddhist remains / written sources and older philological historical research, we came to the conclusion that the Buddhist temple Xingyuange 興元閣 was erected as a buddhist one from the start, and not a palace remains of Ogodei Khaan, and that the palace remains would be elsewhere in deiffrent place, probably inside of current Erdene-Zuu Monastery aera.

As a result of the above-mentioned study, we have held International Conference on Ten Years of the World Heritage Site - Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present in Kharkhorin, and have published the book for the papers of the Conference, and the third volume of the journal The Heritage of Orkhon Valley, respectively.

研究分野：東洋史

キーワード：東洋史 考古学 仏教史 宗教史 環境保護 国際研究者交流 モンゴル国

1. 研究開始当初の背景

モンゴル国のユネスコ世界文化遺産「オルホン渓谷の文化的景観」のうち、現存するモンゴル最古の仏教寺院エルデニゾーの過去・現在・未来を総合的に調査・研究する科研プロジェクト(基盤A, 2009~11年度; 研究代表者は松川節)の成果として、エルデニゾー寺院の立地点は、古くは8世紀ウイグル時代から13・14世紀のモンゴル時代を経て、16世紀末のエルデニゾー建立の時代、さらに1930年代末の宗教弾圧によって破壊される時代に至るまで、実に1300年以上の文化的重層性を有しているという新たな事実が判明し、2011年9月に現地で国際シンポジウムを開催してこれを報告したところ、我々のプロジェクトはその学術的貢献及び地域貢献の点でモンゴル側より高く評価され、その継続を強く要請されていた。

2. 研究の目的

近年の歴史学的碑刻・文書調査と考古学的発掘調査により、13世紀~14世紀前半のモンゴル支配時代、そして14世紀後半~17世紀のポスト・モンゴル時代において、北アジアで独自の仏教文化が存在していたことが明らかになりつつあるが、それらの仏教文化に通時的な連続性・継承性があるか否かという問題はほとんど研究されず、看過されてきた。

本研究は、モンゴル高原のオルホン河・トーラ河流域を調査対象域とし、新たに出土・発現した13世紀~17世紀までの仏教遺跡や文字資料が、従来の文献学的歴史研究といかに整合性を持つか、また統合可能かを明らかにしつつ、仏教をキーワードとして浮かび上がる北アジア史の新たな地平を追究すること、すなわち、新出土仏教遺物と文献史料の統合による13~17世紀北アジア史の再構築を目的とする。

3. 研究の方法

(1) 13・14世紀カラコルムの仏教寺院から出土した遺物を調査・研究した上で、(2) それらが15~17世紀の間に伝存した結果、16世紀末のエルデニゾー寺院の建立時にどのような影響を与えたかを、考古学・歴史学・仏教学・寺院建築学・保存科学などから多面的に検証し、(3) 結果としてもたらされる新たな知見に基づき、北アジア仏教史を再構築する。

2012年度は3回の国内研究会(うち1回はモンゴルから研究者招聘)とモンゴルにおけるカラコルム仏教遺物の悉皆調査、2013年度はモンゴルにおけるエルデニゾー寺院出土仏教遺物の調査と3回の国内研究会(うち1回はロシア・中国から研究者招聘)、2014年度はモンゴルにおける国際シンポジウムの開催とその成果刊行

(論文集一冊と、一般向けモンゴル語・英語によるもの一冊)、2回の国内研究会をそれぞれ行う。

4. 研究成果

(1) 2012年度は13・14世紀カラコルムの仏教寺院から出土した遺物を調査・研究する基盤整備のために、基礎研究と現地における予備調査(2012年5月1日~5月7日、8月15日~8月24日、9月8日~9月13日)とを行った。その成果は、5月26日、10月20日、2013年3月2日にそれぞれ大谷大学で開催された研究集会にて報告され、カラコルムの仏教寺院に西夏仏教的要素が見られるという従来の見解は、再検討が必要なこと、カラコルムの仏教寺院に建立されていたとされる高さ100メートルの仏塔の様式については、契丹、高麗、ネパール、チベットの同時代仏塔との綿密な比較検討を通して明らかにする必要があること、13・14世紀のモンゴル高原全体に流布した仏教について、考古学的出土遺物が少なからず発現しており、それらを含めた総合的な研究が必要であること、以上の成果を得た。その意義・重要性は、従来、ほとんど研究されてこなかった13・14世紀モンゴル時代モンゴル高原における仏教伝播の状況について、考古学的証拠から再構築するための方向性を得た点にある。

(2) 2013年度は13・14世紀カラコルムの仏教寺院から出土した遺物を調査・研究するために、現地における本調査(2013年4月26日~5月8日、8月30日~9月13日、11月8日~11月13日)を行った。その成果は、11月23日、2014年3月7日に大谷大学で開催された研究集会にて報告され、エルデニゾー寺院内における小規模な発掘調査の結果、モンゴル帝国時代~元朝期に築かれていた建造物の規模と構造については、一定の結論を出すには未だ至っていないこと、カラコルム遺蹟の興元閣址発掘現場における観察により、モンゴル・ドイツ隊が公表している興元閣建築の編年については再検討が必要であること、ガンダン寺及びモンゴル国立公文書館所蔵資料の解読により、16・17世紀モンゴル仏教に関する考古学的知見と整合性を持つ歴史事実が浮かび上がってきたこと、以上の成果を得た。その意義・重要性は、従来、ほとんど研究されてこなかった16・17世紀モンゴル高原における仏教伝播の状況について、考古学的証拠及び文献資料を融合することによって再構築するための基盤を確保し得た点にある。

(3) 2014年度は13・14世紀カラコルムの仏教寺院から出土した遺物を調査・研究するために、現地における調査(2014年4月25日~5月7日、12月25

日～12月31日、2015年2月15日～2月22日)を行い、その成果は、2014年9月6日・7日に現地で開催された国際シンポジウム及び2015年2月27日に大谷大学で開催された研究集会にて報告され、カラコルムの仏閣「興元閣」は、オゴデイ・ハーンの宮殿址に建立されたのではなく、元々仏閣として建立されたものであり、オゴデイ・ハーンの宮殿址は、別の場所、おそらくは現在のエルデニゾー僧院内のどこかにあったであろうが、その場所は未だ特定できないという結論に至った。

上述の2014年9月6日・7日に現地で開催された国際シンポジウム「世界遺産「オルホン渓谷の文化的景観」の10年

過去と現在」においては、本研究プロジェクト参加者(代表者:松川, 分担者:三宅, 白石, 二神, 連携研究者:藤原, 包, 研究協力者:エルデネバト, オチル, 清水)が報告を行い、仏教をキーワードにして浮かび上がるアジア史の新たな地平を追究するための課題を共有することができた。

以上の研究の成果として、『オルホン渓谷遺産』第3号(2015年1月, ウランバートル)と、英文とモンゴル文による国際シンポジウム論文集(2015年3月, ウランバートル)計2冊を刊行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

Takashi MATSUKAWA, "Erdene-Zuu II Project: A Reconstruction of 13th to 17th Century North Asian History Based on a Synthesis of Newly Unearthed Buddhist Artifacts and Textual Historical Sources," *International Conference on Ten Years of the World Heritage Site - Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present*. (査読無し) 2015, Ulaanbaatar, pp.3-5.

Noriyuki SHIRAIISHI, "On the Lower enclosing wall of Erdene zuu monastery," *International Conference on Ten Years of the World Heritage Site - Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present*. (査読無し) 2015, Ulaanbaatar, pp.83-87.

Yoko FUTAGAMI, "Necessary Efforts to Share the Outstanding Value of the World Heritage Property Orkhon Valley Cultural Landscape for the Next Ten Years," *International Conference on Ten Years of the World Heritage Site -*

Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present. (査読無し) 2015, Ulaanbaatar, pp.57-62.

Takato FUJIWARA, "A Political Background of the Construction of the Xingyuange," *International Conference on Ten Years of the World Heritage Site - Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present*. (査読無し) 2015, Ulaanbaatar, pp.68-72.

Muping BAO, "A Multi-Storied Wooden Building in Thirteenth Century Karakorum: A Study on the Architectural Style of the Xingyuan Pavilion." *International Conference on Ten Years of the World Heritage Site - Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present*. (査読無し) 2015, Ulaanbaatar, pp.72-82.

Natsuki SHIMIZU, "Community Participation Based Usage of Cultural Heritage Sites in Kharkhorin." *International Conference on Ten Years of the World Heritage Site - Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present*. (査読無し) 2015, Ulaanbaatar, pp.135-142.

Osamu INOUE, "Materials Related to Mongolian Maps and Map Studies Kept at Prof. W. Kotwicz's Private Archive in Cracow." *Rocznik Orientalistyczny* 67-1, (査読有り) 2014, pp.116-150.

Osamu INOUE, "Incense Offering Text "Sang" and Mountain Worship of the Mongols." A window onto the other: contributions on the study of the Mongolian, Turkic and Manchu-Tungusic peoples, languages and cultures, dedicated to Jerzy Tulisow on the occasion of His 70th birthday. (査読無し) 2014, pp.130-145.

包慕萍 「從游牧文明的視角重探元大都的都市規劃——從哈刺和林到元大都」『中国建築史学会分会2013年会論文集』第17卷, (査読有り) 2013, pp.655-667.

包慕萍 「蒙古帝国之后的哈刺和林木造佛寺建築」『中国建築史論叢刊』第8卷, (査読有り) 2013, pp.172-198.

Takashi MATSUKAWA, "Kotwicz's Contribution to Mongolian History: the Rediscovered 1347 Sino-Mongolian Inscription," *In The Heart of Mongolia :*

100th Anniversary of W. Kotwicz's Expedition to Mongolia in 1912. (査読無し) 2012, pp.191-205.

井上 治 「焚香儀礼文に見るモンゴル人の山岳崇拜」『南道文化研究』第23巻, (査読無し) 2012, pp.185-229.

[学会発表] (計5件)

Shintaro ARAKAWA, "Linguistic Remarks in the Tangut Inscriptions from Dunhuang," International Conference on Inscription Studies, August 12, 2014, Ulaanbaatar, Mongolia.

包 慕萍 「元の大都の都市計画の再考：“胡同”の語源と“胡同体制”」Senior Academics Forum on Ancient Chinese Architectural History, 2013年12月07日, 近畿大学(大阪府東大阪市)。

井上 治 「モンゴルから見た北東アジア接壤地域」北東アジアの地域交流 古代から現代、そして未来へ, 2013年11月15日, 島根県立大学(島根県浜田市)。

Takashi MATSUKAWA, "New Perspectives on the Historical Evidence and Archaeological Findings from Monastery Erdene-Zuu," 13th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, July 27, 2013, Ulaanbaatar, Mongolia.

松川 節 「少数民族言語石刻資料研究の意義和方法」中国社会科学院民族学與人類学研究所(招待講演)2013年05月28日, 北京市(中華人民共和国)。

[図書] (計3件)

T. MATSUKAWA and A. OCHIR (eds.) *International Conference on Ten Years of the World Heritage Site - Orkhon Valley Cultural Landscape: Past and Present.* 2015, Ulaanbaatar, Mongolia. 168pp.

T. MATSUKAWA, A. OCHIR et al (eds.) *Орхон хөндийн өв (Heritage of Orkhon Valley)* vol.3, 2015, Ulaanbaatar, Mongolia. 107pp.

Tulisow, J. and O.INOUE (eds.) *In The Heart of Mongolia : 100th Anniversary of W. Kotwicz's Expedition to Mongolia in 1912.* Polish Academy of Arts and Sciences, 2012, Klakow, Poland. 413pp.

[その他]

ホームページ等

<http://www.qutug.com/qutugxoops/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

松川 節 (MATSUKAWA, Takashi)
大谷大学・文学部・教授
研究者番号: 60321064

(2)研究分担者

三宅 伸一郎 (MIYAKE, Shin'ichiro)
大谷大学・文学部・准教授
研究者番号: 00367921

二神 葉子 (FUTAGAMI, Yoko)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・企画情報部・情報システム研究室室長
研究者番号: 10321556

白石 典之 (SHIRAIISHI, Noriyuki)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号: 40262422

井上 治 (INOUE, Osamu)

島根県立大学・総合政策学部・教授
研究者番号: 70287944

(3)連携研究者

荒川 慎太郎 (ARAKAWA, Shintaro)
東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号: 10361734

藤原 崇人 (FUJIWARA, Takato)

関西大学・東西文化研究所・研究員
研究者番号: 50351250

包 慕萍 (BAO, Muping)

東京大学・生産技術研究所・協力研究員
研究者番号: 40536827

(4)研究協力者

清水 奈都紀 (SHIMIZU, Natsuki)
大谷大学・真宗総合研究所・協同研究員
研究者番号: 90649237

アヨーダイ・オチル (OCHIR, Ayudai)

モンゴル国・国際遊牧文明研究所・研究員

ウラムバヤル・エルデネバト (ERDENEBAT, Ulambayar)

モンゴル国立大学・総合科学部・教授